

グループホームにおける認知症高齢者の 徘徊・外出行動の分析

今川 真治

(2005年9月30日受理)

The analysis of the wandering behavior of an elderly person with dementia in a nursing home.

Shinji Imakawa

Among the behavioral disturbances associated with dementia, wandering and wandering-related activities are perhaps the most difficult for family caregivers and care staffs. However, because the causes and the patterns of wandering are not identical in all patients, and are rather influenced by the individual backgrounds, there is not much quantitative research of the wandering behavior itself. The purpose of this paper is to demonstrate, through a single case study of an elderly person with dementia, quantitative patterns of wandering behavior so that these behavior analysis methods can be incorporated into nursing home care.

This research was conducted in a nursing home, Furusato-no-Ie “Joka”, in Shimabara, Nagasaki Prefecture. The subject of this current study was one elderly woman, 79 years old, with mild dementia (35 points on the NM scale; 48 points on the N-ADL). For a one week research period, a blotter was set at the entrance of the nursing home and the exact time of the subject’s entry and exit were recorded. Three one-day periods before and after the wandering research period, the behavior in daily life of the subject was video taped 6 times a day (10 minutes per time). The video data, processed point- and one-zero-sampling methods, showed interpersonal behaviors and facial expressions of the subject.

The subject comes and goes very frequently at the vestibule to the home from before dawn to dusk every day. A total of 232 outings were observed in the research period, of which 211 were free-will outings. The subject’s outing period accounts for about 46% of potential time, so the outing was regarded as having become an inextricable part of life for the subject. Of all the parts and places in and out of the nursing home, the entrance seems to play the essential role in promoting the residents’ and staffs’ mutual interactions. The subject’s communication behavior and positive emotional expressions such as laughter and smiling were notably observed around the entrance.

Key words: dementia, wandering behavior, nursing home

キーワード：認知症，徘徊・外出行動，グループホーム

1. はじめに

認知症高齢者に見られるさまざまな行動障害のうち、徘徊行動（あるいは外出癖）は、高齢者を介護する家族や介護施設のスタッフにとって、もっとも対処の難しい問題の一つであり、時には失踪や事故などによって高齢者自身に大きな危険を負わせる問題でもあ

る（Roberts, 1999; Lai & Arthur, 2004）。しかし、徘徊の原因やその現れ方には、高齢者が個別にかかえている問題や、居住環境、あるいは利用施設の諸事情などによって違いが見られ、それぞれに個別に対応する必要が求められている。そのような背景から、従来、徘徊行動そのものの定量的な分析はほとんど行われてきていない（Lai & Arthur, 2004）。しかし、認知症高

齢者に対する適切な対処や介護のためには、徘徊行動の機序や徘徊のパターン、その経過などの情報をより詳細に把握する必要があると考えられる。

本研究では、グループホームに入居する一人の認知症高齢者を対象とし、この対象者がホームの玄関を入り出したデータから、徘徊行動パターンの定量的な解析を試みた。さらに、ビデオを用いた行動観察と分析の手法を用いて、ホーム屋内と屋外におけるこの対象者の他者との社会的相互交渉と感情表出行動を分析し、徘徊行動の契機や要因に関する考察を試みた。

2. 研究方法

2-1 研究の概要

本研究は、長崎県島原市にあるグループホーム「ふるさとの家城下（代表：小関みどり）」において、平成13年度に行われた「民家型グループホームにおけるエンパワーメントケア事業」、および平成14年度より継続的に行われている「行動研究の手法を痴呆性高齢者の介護実践に援用するための研究」プロジェクトの一部として行われた。これらの研究は、認知症の進行を遅延させたり、場合によっては改善したりする効果が大きいといわれる（小宮山，1999；塚本，2003）、認知症高齢者に対するグループホームケアの実態や利点を、入居する認知症高齢者を対象とした行動観察と分析の手法を用いることによって明らかにしようとするものである。

2-2 研究対象者

本研究の対象者は、ホームに入居している79歳の女性の認知症高齢者1名（以下Mさん）であり、NMスケールによる認知症程度評価は軽度認知症、N-ADL得点は47点で、日常生活はほぼ自立しており、要介護度はⅢであった。

Mさんは、当グループホームに入居して約1年を経過し、入居当初の数カ月間頻繁に現れていた危険性の高い屋外徘徊（施設を出て行き、どこをどう歩いたかわからず長時間の放浪のあと保護されたり、捜索が必要となるといった類の徘徊）はほとんど見られなくなっており、入居後数カ月間行われていたホーム職員による1対1による常時の付き添いや、外出したときの連れ戻りなどの対処が必要とされなくなっていた。しかし、玄関を頻繁に出て行くという行動パターンだけは消失せずに継続しており、徘徊的な要素を極めて強く含んだ外出行動と見なされていた。そのため、いつまた不測の事態が起こるかかわからず、ホーム職員はMさんの居場所に少なからず注意を留めておかなけれ

ばならなかった。本論ではMさんのこのような行動を徘徊・外出行動と呼び、本文中では外出行動と簡略化して呼称するが、これは徘徊と明確に区別できるものではない。

なお、本研究において行っているビデオ撮影に関しては、ホーム職員と入居者の家族に対する説明を十分に行い、入居者の家族から研究協力に関する承諾書を得て行っており、倫理的な問題はない。

2-3 研究期間とデータ収集の方法

Mさんの外出パターンに関するデータ収集は、平成14年10月13日から19日までの7日間にわたって行われた。この期間中、ホームの玄関に常時、時計と記録紙を設置しておき、Mさんが玄関を出た時刻と、屋外から玄関に戻った時刻を、ホーム職員が協力して連絡を取り合いながら記録紙上にすべて記録した。また、買い物や他者の送迎などでの外出はその旨記載し、さらにその他の場合でも、可能な場合は外出の理由を記録した。職員相互の連携により、Mさんの玄関出入りに関して、ほぼ正確な時刻の記録が可能であった。

上記外出パターン分析のデータ収集期間を挟んだその前後の時期である、平成14年9月後半の3日間と10月後半の3日間に、Mさんの屋内外における他者との社会的相互交渉と感情表出行動を分析するためのデータ収集を行った。データの収集に当たっては、各日の午前7時30分から午後7時30までの12時間を2時間ごとの6つのブロックに区分し、各ブロックについて10分間ずつ、ビデオを用いてMさんを撮影した。ビデオ撮影は筆者が単独で、Mさんから5メートル以上の距離を置きながら、Mさんの行動に可能な限り影響を与えないよう配慮しながら行った。なお、この時期はプロジェクトの開始から1年以上を経過しており、それまでのホーム職員や入居者との関係づけの結果、筆者のビデオ撮影は特別な影響を与えなくなっていた。

2-4 データ分析の方法

外出行動の分析データについては、本研究の手続き上、記録紙に残されたのは玄関出入りの時刻に関するデータのみであり、起床や就寝時刻の他、食事の時間なども記載されていない。そのため、Mさんにとって、自発的な外出が生活時間全体に対して占める割合などを計算する場合には、次の時間帯を除外して分析した。

- ①起床から初回外出までの時間
- ②食事の時間帯を挟んだ、食事前最後の帰宅時刻から食後最初の外出時刻までの時間
- ③最終帰宅時刻から就寝までの時間

- ④ホームの行事等での外出で、自発的でない外出時間
- ⑤記録ミスによる外出時刻不明の外出、および帰宅時刻不明の外出の前後の時間

ビデオで撮影された行動の分析には、10秒を単位とした点観察法とワン・ゼロ法(Altmann, J., 1974)を用い、Mさんの滞在場所と他者との近接状態(2m以内・1m以内・身体接触)を10秒ごとに記録するとともに、他者への接近行動や他者からの被接近行動、発話や会話などの言葉による相互交渉、感情表出行動などが単位時間の10秒内に観察されれば1を、観察されなければ0を与えてカウントするという方法で数量化を行った。

3. 結果と考察

3-1 外出行動のパターン分析

外出パターンを分析した7日間に、Mさんがホームの玄関を出たのは232回であり、このうち211回(90.9%)が徘徊とみなせる外出であった。前述のように、この時期におけるMさんの外出行動は、重度認知症高齢者に一般的に見られるような、無目的に見える、いわゆる徘徊行動(Snyder et al., 1978; Dawson & Reid, 1987)というわけではなく、「ちょっと畑を見てくる」、「神社までお参りに行ってくる」というような外出理由を付け加えたものもあり、外出時にMさんがそれらの理由をホーム職員に告知して出かけるようなことも少なくなかった。しかし、外出時の行動の分析からは、外出理由としたような特定の目的が達成されたという事象はほとんど認められなかった。

3-1-1 外出時刻の一般的傾向と外出回数・時間

図1に、観察された記録日ごとの初回外出時刻と最終帰宅時刻を示す。ただし、本研究の手続き上、記録紙上には起床時刻と就寝時刻が記録されていないため、起床後どの程度の時間をおいて外出が始まり、最

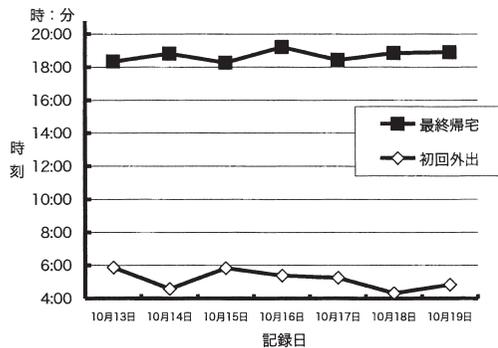


図1. 初回外出時刻と最終帰宅時刻

終帰宅からどの程度の時間を経て就寝したかは明確ではない。

Mさんは早い日には4時台、遅い日でも6時までには初回の外出が記録されていたが、ホームの日常生活記録と照合してみると、Mさんは通常5時前後に起床していることから、起床するとまもなく外出を開始する傾向があったといえる。また、本研究の時期には、通常20時までには就寝していたが、7日間で6日は18時台に最終の外出から帰宅しており、最終帰宅から就寝までには1時間前後の時間があつたと考えられる。

図2は、すべての記録日の外出回数を時間帯ごとにまとめたものである。記録された外出時刻を1時間ごとにまとめて見ると、17時台には特に多く外出する傾向があつたが、それ以外のほとんどの時間帯にも10回以上の外出が見られた。また、午前中に比べて午後の方が、外出回数が多い傾向があつた。Mさんの外出には、ホームの車に同乗してのデイ・サービス利用者の送迎や買い物、その他、レクリエーションとしてのドライブなどが含まれたが、その回数は1日あたりせいぜい1回から5回程度であり、それ以外の外出はすべてMさんの自発的な外出行動であつた。

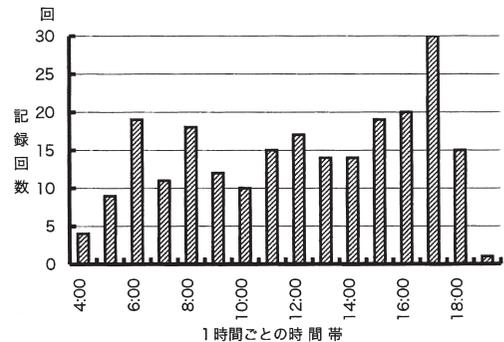


図2. 時間帯ごとの外出回数

図3は、1回あたりの外出時間の分布を示したものである。1回あたりの外出時間の分布を見ると、5分未満の外出が最も多く、所要時間の長い外出ほどその出現数は少なかった。後述の行動観察時の記録と対照すると、5分未満の外出の多くはホームの庭内、あるいはホームの玄関から30m程度離れた一般道路まで出てすぐに戻るというものであり、休息や特定の場所での滞留のないものがほとんどであった。これに対し、15分以上の外出では、坂道になっている一般道路を上り下りすることが多く、通常2~4回の腰をかけたの休息、または立ち止まっの滞留が認められた。記録されたすべての外出の所要時間の平均は9分56秒であつた。

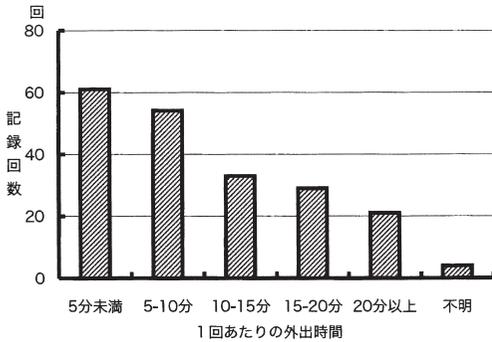


図3. 外出時間ごとの記録回数

3-1-2 外出時間と非外出時間の割合

分析方法の部分で述べたように、Mさんの起床から就寝までの全ての時間から、記録手続き上の制限によって除外された時間帯以外の時間を「(自発的) 外出可能時間」とし、この時間帯のうち、実際にMさんが外出していた時間と外出していなかった時間を、記録日ごとにまとめて表1に示す。

表1. 外出可能時間と実際の外出時間

	外出可能時間	外出時間	非外出時間
10月13日	8:38	3:40	4:58
10月14日	11:03	5:38	5:25
10月15日	8:11	4:23	3:48
10月16日	10:38	4:39	5:59
10月17日	11:21	5:25	5:56
10月18日	11:38	5:18	6:20
10月19日	9:48	3:45	6:03
合計	71:17	32:48	38:29
平均	10:11	4:41	5:30

(時間：分)

記録を行った1週間における外出可能時間の平均は10時間11分であり、このうちMさんが外出していた時間は、平均4時間41分、ホーム内にとどまっていた非外出時間は5時間29分であった。この結果から、Mさんにとって自発的な外出は日常生活時間のうち約46%という大きな部分を占めている重要な行動であると言えるであろう。

3-1-3 生活時間帯区分と外出行動

外出行動が観察された時間帯を、ホームでの日常生活の流れに沿って「朝食前(その日の初回外出から朝食前最後の帰宅まで)」、「朝食後昼食まで(朝食後最初の外出から昼食前最後の帰宅まで：以下、午前中と表記)」、「昼食後夕食まで(昼食後最初の外出から夕食前最後の帰宅まで：以下、昼食後と表記)」の3つのブロックに分け、それぞれの時間帯の外出可能時間と実際の外出時間、およびホームでの滞留時間を図4

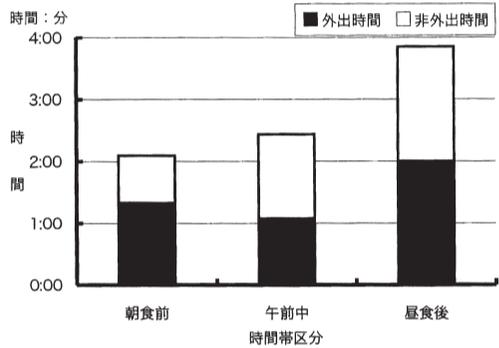


図4. 時間帯区分ごとの外出可能時間と実際の外出時間

に示す。なお、夕食後の時間帯は外出可能時間が短く、Mさんの外出回数も少なかったため分析から除外した。

朝食前の時間帯は、もっとも外出可能時間が短く、その平均は2時間5分であり、このうちMさんが実際に外出していた時間は1時間20分であった。午前中の時間帯の外出可能時間は2時間26分、実際の外出時間は1時間5分であった。昼食後の時間帯はもっとも外出可能な時間が長く、3時間51分であり、このうちMさんが外出していた時間は2時間であった。

朝食前の時間帯は、外出可能時間がもっとも短い時間帯であるが、この時間帯における外出可能時間に占める外出時間の割合は約64%に達し、Mさんはこの時間帯の多くを外出に費やしていた。これに対し、午前中と昼食後の時間帯の外出は、外出可能時間の約半分程度を占めるのみであった。

次に、上記の3つに区分した時間帯ごとに、実際の外出時間を5分ごとに区切った記録回数を図5に示す。

時間帯区分ごとに外出時間の分布を見ると、朝食前には10-15分の外出が少なく20分以上の外出が多かったが、全体としてはばらつきが小さかった。また、午前中は短い時間の外出ほど、より多く観察される傾向

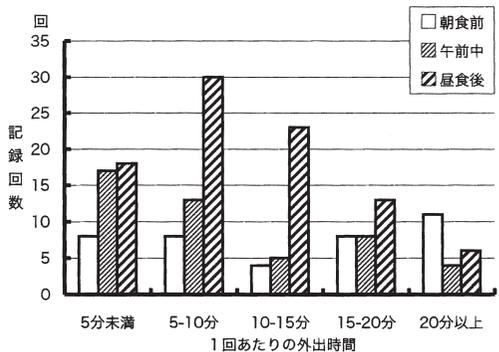


図5. 時間帯区分ごとの外出時間

があった。他方、昼食後の時間帯には5分から15分程度の外出が多く観察された。

図5では各時間帯における外出可能時間の違いが考慮されておらず、時間帯ごとの直接的な比較ができない。そこで図6では、各々の区分時間帯に60分間の観察を行うと、それぞれの長さの外出がどの程度観察されると期待できるかを算出して示す。

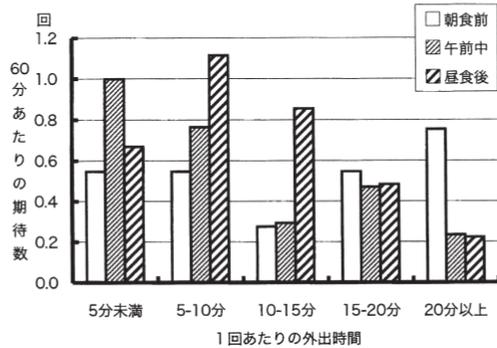


図6. 60分あたりの外出時間の期待数

この図から、5分未満の外出は午前中に多く、5-15分程度の外出が昼食後の時間帯に多いことが明らかとなった。さらに15分を超え、20分以上にわたるような長時間の外出は朝食前に特異的に多かった。この結果は、Mさんが時間帯によって外出の質を変えていることを示唆しているが、本研究のデータからは、その違いを明らかにすることはできなかった。

3-1-4 外出間隔

外出から戻り、玄関に入ってから次の外出のために玄関を出るまでの時間、すなわち外出間隔を分析した(図7)。

図7から、朝食前と昼食後の時間帯においては、短い外出の後でも長い外出の後でも、次の外出までの間隔はおよそ6分から12分で変動が小さかった。このことは、朝食前と昼食後の外出時間の長短の分布が大きい

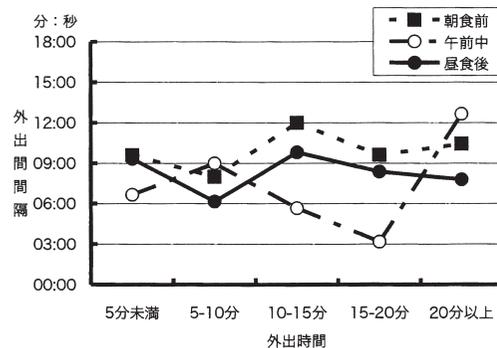


図7. 外出時間と外出間隔

く異なっていた(図5, 図6)ことと対照的であり、ホーム内での滞在時間が、外出の長短とは異なる何か別の要因に影響されていたことを伺わせた。これに対し午前中の時間帯においては、10分までの短い外出後の間隔は同様の傾向であったものの、10分から20分の外出のあとにはホームにいる時間が短く、20分以上の長い外出のあとには長い間隔を取るという傾向があった。以上のような、時間帯による外出間隔の相違も、外出の質の違いと関係しているかもしれない、更なる検証が必要である。

3-2 対人行動と感情表出行動の分析

3-2-1 滞在場所

研究を行ったグループホームの屋内外の略図を、図8に示す。当グループホームは築後約100年を経た古い民家をそのまま使用しており、ホーム入居者は日常の多くの時間を畳敷きの居間で過ごし、食事時にはダイニングテーブルの置かれた台所へ移動して食事する。本研究では建物内のこれ以外の場所を「その他」に分類したが、Mさんが実際に滞在したのは、そのほとんどが玄関と、玄関に隣接する廊下であったため、以下本文中では「玄関」と呼称する。

ホーム前には通常ホームの駐車スペースとしても使用されている庭があり、10m程度の道路Aを通してこの地区への取り付け道路Bとつながっている。道路Bの長さは約30mで、その先は、それほど通行量は多くないが勾配のある一般道路Cとなっている。Mさんが通常外出するのはこの道路Cまでであり、道路Bとの

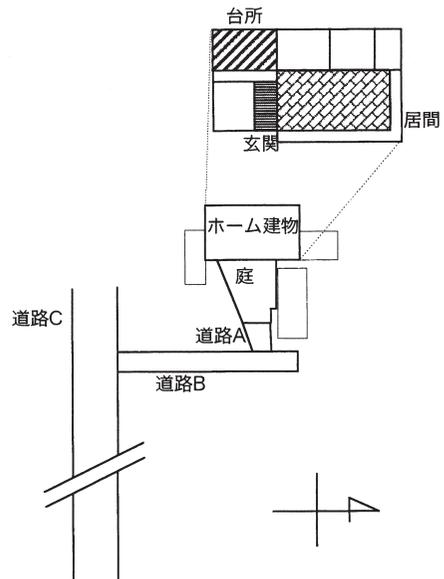


図8. グループホーム建物と周辺道路の略図

交差点から道路Cの坂道を下りきったところまでの長さは、約110mの距離であった。

行動を分析した6日間において、Mさんが実際にどこにいたのかを図9に示す。Mさんの実際の滞在場所を詳細に見ると、屋内が60.9%、屋外が39.1%であった。場所別に見ると、最も長く滞在したのはホーム内の居間であり、次に多かったのは道路C、次が台所という順であった。また屋内のうち玄関は、全観察時間の6.8%を占めるのみであった。

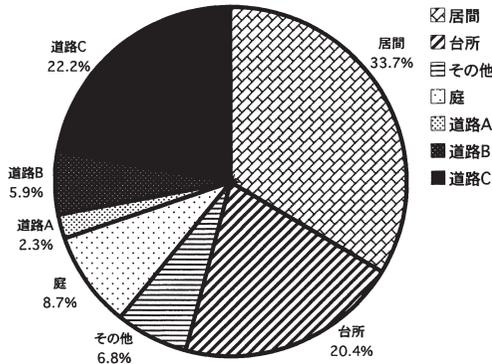


図9. Mさんの滞在場所

3-2-2 他者との近接と接近・被接近の生起率

図10に、それぞれの滞り場所ごとの近接者数を1分あたりの延べ人数として示す。屋内においては、屋外よりも多くの他者との近接が観察され、特に居間においては、1分間あたり、延べ8人程度の他者との近接が観察された。これに対し、屋外での近接者数はせいぜい1人程度に留まり、屋外においては他者との社会的交流が起こりにくいと推察された。さらに他者との身体接触行動は、そのほとんどが居間と玄関において観察された。居間や台所は入居者の通常の生活場所

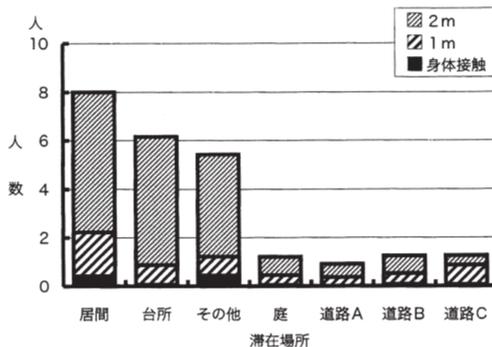


図10. 滞り場所ごとの近接者数 (1分あたりの延べ人数)

あり、居間におけるソファや座布団の配置状況、およびダイニングにおける着座位置の関係から、これらの場所において他者と近接したり、身体を接触させる他者が多いことは当然といえるが、玄関において身体接触を含む他者との近接が多いことは特筆に値する。

図11は、Mさんが他者の周囲1m以内に接近する行動と、他者がMさんの周囲1m以内に接近する事象の生起率を示している。他者への接近と他者からの接近が最も多く生じたのは台所であるが、これは、ダイニングのテーブルや椅子の配置によって、人の動線が制限されており、他者の横や後ろを通らなければ他所へ移動できないという物理的必然によるところが大きい。他方、居間における接近・被接近の生起率の高さは、ここでの生活時間が最も長かったことと関係していると考えられる。

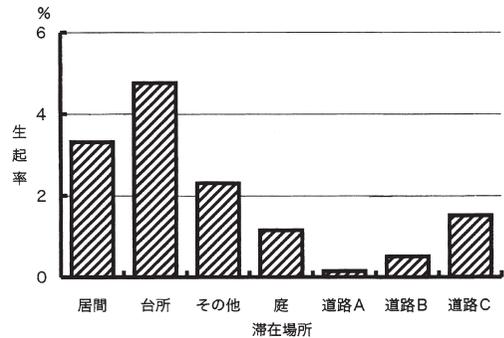


図11. 他者への接近+被接近の生起率

そこで、Mさんが各滞り場所に滞在した時間を母数にして、その場所に滞り中の接近・被接近の生起率を算出したのが図12である。滞在時間を母数にした接近・被接近の生起率は玄関において最も高く、居間における生起率は高くなかった。このことは、玄関という場所が、それがなければ生じにくい他者との社会

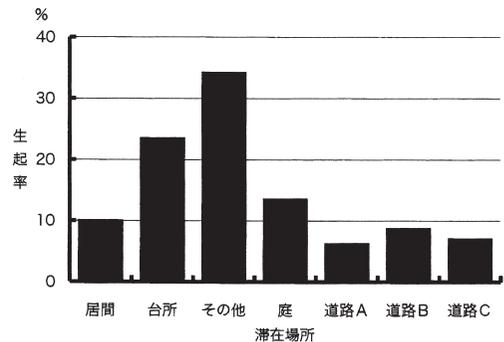


図12. 滞り場所ごとの他者への接近+被接近の生起率

的な相互交渉の基礎となる、人同士の近接状態を形成しやすい場所であることを示しており、ここでも玄関という場所の持つ特殊性が指摘できるであろう。

3-2-3 言葉による相互交渉と感情表出行動

Mさんからホーム職員や他の入居者に向けられた発話・会話の生起率と、他者からMさんに向けられた発話・会話の生起率を図13に示す。Mさんと他者との間で最も多くの言葉による相互交渉が観察されたのは居間であり、次に多かったのは道路Cであった。道路Cが車通りの少なくない一般道であり、道路C上における近接者数がそれほど多くなかったことを勘案すれば、ここでの他者との言葉を介した相互交渉の多さは特筆に値する。

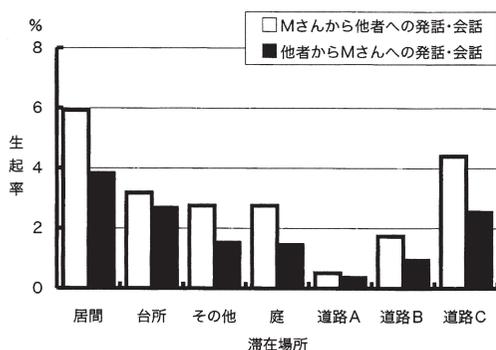


図13. 言葉による相互交渉の生起率

Mさんの滞在時間を母数とした分析結果を図14に示す。Mさんの滞在場所のうち、滞在時間がそれほど大きくなかった玄関や庭、その他屋外の道路上において、Mさんから他者に向けられた発話・会話と、他者からMさんに向けられた発話・会話のいずれも生起率が高い傾向が認められた。むしろ滞在時間の割合が高かった居間と台所においてそれらの生起率が低く、Mさんにとって、居間や台所という場所は、相対的に言語に

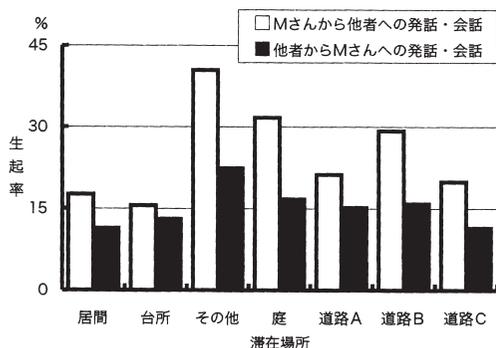


図14. 滞在場所ごとの言葉による相互交渉の生起率

よる社会的交流が起りにくい場所であることが伺えた。特に、滞在場所としての割合がそれほど高くなかった玄関において、Mさんと他者との言語による関わりかけが最も多く観察され、この結果によっても、Mさんにとって玄関が他者との社会的交流を持つ上で特異的な場所である可能性が示唆された。

Mさんは日常的に機嫌の変化の少ない方で、笑顔や笑い以外の感情表出行動（例えば悲しみや怒り、驚き、羞恥など）はほとんど観察されなかった。そこで、Mさんの感情表出行動のうち、観察される割合の高かった（全観察時間の29.2%で生起）笑顔と笑いの生起率を、滞在場所ごとに示したのが図15である。

笑顔と笑いが最も多く出現したのは居間であり、観察された笑顔と笑いの43.2%が居間で観察された。居間では歌を歌ったり体操をするなどのレクリエーションが行われることが多く、通常はあまり社会的でないMさんも、このような場面でのホーム職員との交流の中で、笑顔を見ることがあった。次に笑顔・笑いの生起率が高かったのは道路Cであった。他者との近接や接近・被接近の頻度が低い道路Cにおいて観察されたMさんの笑顔や笑いは、その多くが自発的なものであり、通行する車や他者、目に映る景色などに対して自ら笑いかける行動が頻繁に観察された。

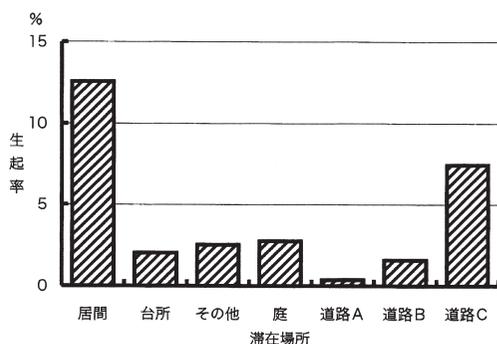


図15. 笑顔・笑いの生起率

Mさんの滞在時間を母数とした分析結果を図16に示す。台所と道路Aを除き、それぞれの滞在場所に滞在中の約30%において、笑顔・笑いが観察された。特に玄関においては居間と同程度の割合で笑顔・笑いが生起しており、このデータからも、Mさんにとっての玄関は、他者との社会的交流が生起しやすく、他者への声かけや他者からの声かけとともに、何らかの肯定的な感情状態を作り出しやすい場所であったことが推察される。

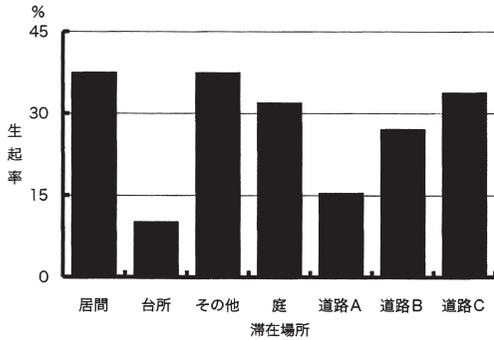


図16. 滞在場所ごとの笑顔・笑いの生起率

4. 総合論議

本研究の対象者であるMさんは平成13年8月に当グループホームに入居し、入居当初は強い不安傾向を示すとともに頻繁な徘徊行動を示した。入居してから数週間の間に、いつの間にか外出して失踪し、警察などに保護されるという事件を数回繰り返した。そのため、入居後数カ月の間、施設職員は常にMさんの動向に注意を払い、外出時には必ず誰かが同行する必要があった。しかし、本論のデータ収集期間である入居1年を経過したこの時期には、Mさんの外出傾向は常同化(stereotyped)しており、もはや「徘徊」というよりも「常同化した外出」行動と呼ぶべきものとなっていた。そのため、Mさんの外出は当人の自由にされ、職員の同行は必要とされていなかった。ただ、Mさんの姿が長い時間見えないことにホーム職員が気づくと、道路Cまで確認に行くということが必要であった。

起床後ほどなくホームの玄関を出て行き、最終の帰宅時刻から間もなく就寝してしまうという行動パターンから推察されるように、Mさん自身にとって外出行動はきわめて重要な意味を持っていたと考えられる。Mさんの外出行動は1日あたり30回前後、1時間あたりにしても2回以上と高頻度に観察される行動であり、Mさんにとって自発的な外出が可能であるすべての時間帯の約46%を占有していたことからそのことが伺われる。

Mさんは漁師だった夫を亡くしてから、しばらくの一人暮らしの後認知症を発症したが、まだ夜も明けぬうちから離床し、外出して近所を見回るといった行動パターンは、漁港まで夫を見送りに行き、その足で畑の作物の様子を見て回っていたという、長い間の生活習慣がそのままに残存しているのではないかと考えられた。早朝、朝食前の時間帯の外出が長時間にわたることも、その名残であると考えられるかもしれない。そ

の意味からも、Mさんにとって外出行動は、切っても切れない生活の一部として機能しており、失踪の危険を最少にとどめる努力の上で、容認し見守ることが必要な行動であると思われる。

Mさんは日常生活時間の50%以上を居間と台所などの屋内で過ごしていたが、これらの場所においては近接者の数も多いため、他者との近接を基礎として、他者に対する発話や会話、笑顔や笑いが多く生起していた。しかしその一方で、滞在時間を母数とした分析においては、近接者数が少なく、他者への接近や被接近の生起率も低い屋外において、Mさんから他者に向けられた発話や会話が高い割合で観察され、さらに笑顔や笑いも多く観察されたことも見逃してはならないであろう。

中でもとりわけ、屋内と屋外の接点と言うことができる玄関での滞在中に、他者への接近や他者からの接近が高い割合で観察された。さらに玄関では、他者との言葉による相互交渉が極めて高い割合で出現し、笑顔と笑いの生起率も高かったことを考え合わせると、Mさんにとって、玄関という場所の持つ特殊性が指摘できた。それは一つには、玄関という場所が、いわばボトルネックのような構造を持つために、人と人との接近や近接を促進し、さらにはそこに滞在する人が、外出と帰宅という志向的動作性を持つことなどが、人同士のコミュニケーション行動を増進するのかもしれない。そのような意味で、本研究で研究対象としたような民家型グループホームにおける玄関は、その位置や人々の活動動線とも関連して、入居者間の交流を促進する役割を持ちうると考えられる。近年、グループホームやユニット化された特別養護老人ホームなどの施設において、台所や玄関を入居者のコミュニケーションスペースとして見直そうという動きがあるが、これも、入居者同士のコミュニケーションを促進するような、これらの場所の機能に着目してのことかもしれない。

また、外出行動の運動的側面が、Mさんに何らかの肯定的な影響をもたらしていることも考えられ、そのことがMさんの外出行動が減少しない一因であるとも考えられる。笑顔や笑いが近接者数の少ない屋外において自発的に多く出現することは、Mさんが外出そのものを楽しんでいることの現れであり、他者との接近頻度が少ない道路上で、見知らぬ他者に対して離れた場所から声かけをするなど、Mさんの潜在的な社交性を垣間見せる場面も観察された。

本報告では、グループホームで生活するMさんという一人の認知症高齢者の、ホーム玄関出入りのデータを解析するとともに、Mさんの生活場所を中心とした

他者との社会的相互作用や感情表出行動を分析することにより、一部の認知症高齢者が持つ徘徊行動や外出癖における行動の常同性や、その機序を明らかにしようと考えた。その結果、Mさんにとっての外出行動は過去の生活経験と結びついた、常同性の強い、また時間配分などから考えて、きわめてパターン化された行動であると考えられた。さらにその機序については、外出行動の運動的側面がMさんに身体的、精神的快を与えている可能性の他に、過去の生活経験や屋外の環境そのものに対する回帰がMさんに肯定的感情を惹起させている可能性も指摘できる。あるいは、潜在的な社交性から、Mさんが玄関など、他者との近接や言葉を介した相互交渉が起こりやすい場所での滞在を、積極的に選択している可能性も示唆された。

本研究は、社会福祉・医療事業団（高齢者・障害者福祉基金）補助金（平成13年度、「民家型グループホームにおけるエンパワーメントケア事業」、研究代表者：小関みどり）、および文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C、平成12年度～14年度、「痴呆高齢者の行動特性に関する比較行動学的研究」、研究代表者：

今川真治；基盤研究C、平成15年度～17年度、「行動分析手法を痴呆性高齢者ケアの実践に援用するための研究」、研究代表者：今川真治）によって実施した研究と現在実施中の研究成果の一部である。

【引用文献】

- Altmann J. 1974 Observational study of behaviour: Sampling methods. *Behaviour*, **49**: 227-267.
- Dawson P. & Reid D. W. 1987 Behavioral dimensions of patients at risk of wandering. *Gerontologist*, **27**: 104-107.
- 小宮英美 1999 痴呆性高齢者ケア 中公新書
- Lai C. K. Y. & Arthur D. G. 2004 Wandering behaviour in people with dementia. *Journal of Advanced Nursing*, **44**: 173-182.
- Roberts C. 1999 The management of wandering in older people with dementia. *Journal of Clinical Nursing*, **8**: 322-323.
- Snyder L. H., Rupprecht P., Pyrek J., Brekhus S. & Moss T. 1978 Wandering. *Gerontologist*, **18**: 272-280.
- 塚本茂 2003 グループホームケア 講談社